



満洲における「神道」

—代表的な人物を例として

エドワール・レリソン（非文字資料研究センター研究協力者）

「神道」の統一性は近代日本の理想であった。しかし実際には様々な「神道」が存在してきた。明治時代以降「神道」という概念は、「神社神道」、「教派神道」、「新宗教」、「民族神道」等、様々な形を含んできた。さらに「神道」は他の宗教や信仰等と無関係に存在したわけではない。それ故「神道の歴史」は複雑なものとなっている。ただし理解できることもある。それは神道と人間の関係である。なぜならば、宗教家にとっては「神道」が一体となって存在するからである。

私は、その確信を持ちながら、大本教の二大教祖の一人である出口王仁三郎について研究を始めた。フランスのエクス・マルセイユ大学で、同テーマについて修士論文を書いた際、出口王仁三郎の神道が人間だけでなく、「満洲」という地域と密接な関係にあることに気付いた。出口王仁三郎と満洲は私の神道史的研究の基礎となり、パリのフランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO) で「植民地期満洲」における神道に関する博士論文を書き始めた。今は非文字資料研究センターの研究協力者として、満洲における日本の宗教についての知識を深めたいと思っている。

近代日本における「帝国主義」と「アジア主義」は大日本帝国の二つの面であり、アジアに拡大された「勢力圏」がその結果であった。海外に移住した日本人と共に、宗教も海を渡った。そのうちの、海外に建設された神社、いわゆる「海外神社」と海外で行われた新宗教の活動に関する書物、論文、記事等は多数あるが、「人間」を中心に書かれた文献はわずかである。それは「ミクロストリア」(microstoria) というアプローチの対象である。「通時的な大きな歴史事件」というより、当時権力と宗教的な影響を持っていたと思われる人物に関心を持ち、「共時的な研究対象」にしていきたいと考えている。その人物とは明治天皇、大本教の出口王仁三郎、天理教の新田石太郎、満蒙青少年義勇軍の加藤完治、満洲国の皇帝溥儀などであり、これらの人々が満洲における神道の一面をどのように表すかを考察しようと考えている。以下、これらの人物を手短に紹介しておこう。

「満鉄付属地神社」の神となった明治天皇

満洲に建てられた神社の歴史において、明治天皇の崩御が大きな影響を与えた。天皇の代替わり儀式、すなわち明治天皇の大喪と大正天皇の大典の記念事業として多数の海外神社—特に「満鉄付属地神社」—が建設されるきっかけであった。明治天皇は近代日本の「英雄」で明治維新以降の近代国家建設を推進する精神の化身として慕われていた。天皇の聖体が「国体」という概念を通し、「現人神」として国と一体となっていたことが国民に認められていた。身体と聖体は一体になり、「一君万民」という概念の中心となった。日本国民が水平団体のようになり、国家神道と貴族祭祀に巻き込まれるようになった。崩御後、天皇は「神」として、全体の約3割の「満鉄付属地神社」で奉斎された。それと同時に大正天皇の即位をきっかけに13社が設立された¹。そして明治天皇の奉斎は新たな「結合三神」を生み出した。「総鎮守」という、神社の「開拓三神」のような形で天照大神、明治天皇と大国主神が「満鉄付属地神社」で奉斎されるようになった。「現人神」であったころと同様に、崩御の後も、天皇の精神は天と国を繋いだ。明治天皇が与えた影響を新たに考察すれば、近代日本の天皇の神聖化過程や神道の国民への浸透等を深く明らかにすることができると考えている。

「満蒙地域のメシア」・出口王仁三郎

一方で、それと同時に「新宗教」の神道も発展していた。大本教という「新宗教」は20世紀前半において非常に重要な宗教団体であった。特に二大教祖の一人である出口王仁三郎が全国に大きな影響を与えた。1924年2月13日に世界平和の第一段階となる独立国家を建設する目的を掲げ満蒙地域へ旅立った。満洲に到着してから、日本人の大陸浪人と張作霖の補佐官の一人で、もと馬賊の頭目である盧占魁と共に1000人の「神軍」を組織し、モンゴルの首都ウルガ（現在ウランバートル）の政権を覆すために満洲とモンゴルの国境へ向かった。満蒙の広野にスサノオ命とドライ・ラマの再来といった形で現れ、鎮魂帰神法を用いて多くの人々の病を靈的に治し、住民に神のごとく尊敬されていたⁱⁱ。その後6月20日に内

モンゴルと満洲の境の町パインタラで張作霖の軍に包囲されたが、その時の活躍で国民的英雄になった。そこで新しく作られた「万教同根」という教義を利用し、普遍主義的発展を推進することで、1921年の第一次大本事件で反逆的、犯罪的教団という烙印を押された大本教を立て直すことができた。出口王仁三郎の「入蒙」の事例から、近代日本の宗教状況一特に「国家神道」と「新宗教」との緊迫した関係がうかがえる。

さらに「満洲幻想」ⁱⁱⁱといわれる日本人と満洲の特殊理想的でロマンチックな関係を、宗教的な視点から考察できる。

「満洲天理村」の「病気治し」の生き神

満洲で積極的に布教を行った天理教も、明治時代以降の重要な新宗教であった。1934年にハルビン郊外にいた「開拓民」の信者は「天理村」という開拓村まで建設した。その村は「教派神道」の一団体として国家に認定されている。教団の二面性は、教義上の「普遍主義」と実際上の活動の「国家主義」に見出すことができる。農業移民を送ったり、村内で天照大神と明治天皇を奉斎する神社を建てたりし、日本の満洲開拓に精力的に協力する一方で、天理王命を中心に、自らの秩序に従った独立体制を作るといった目的が明確である。天理村に新田石太郎という代表的な人物がいた。天理村の村長に中国の人を対象とした布教に出るように命じられ「布教師」に任命された。最初は村外の人とコミュニケーションがとれず、単独巡回布教者の厳しい生活を経験した。しかし、「病気治し」の能力のおかげで満洲に住んでいる信者を獲得し、1943年に教会を建設し、約2000戸の中国人信者に「神様」のように慕われるようになった。敗戦後、中国人やソ連軍から被害を被った村の死傷者や、いわゆる「残留孤児」を援助した^{iv}。新田石太郎の事例は、「教派神道」の教団の二面性を示すと同時に、満洲における単独布教と農民生活の厳しさを示している。また、天理教の布教者の活動を考察すれば、大本教の例と同様に「病気治し」と「千年王国主義」が近代日本の宗教の重要なポイントであったことが理解できる。

「満蒙開拓の父」・加藤完治

一般的に満洲に建てられた神社を概観すると、「満鉄付属地神社」、「開拓地神社」、「国家的神社」の三つに区別できる。「開拓地神社」は開拓団員によって建設された神社であり、「植民地満洲」のうちで最も「民族的」な神社であった。ただし、その神社の祭神は、開拓団の氏神というより日本帝国の代表的な天照大神であった。その理由は、開拓団の若い団員が満蒙開拓青少年義勇軍

内原訓練所の所長であった加藤完治の影響を受けたからである。この訓練所では、義勇軍のシンボルであった「日輪兵舎」と呼ばれる太陽をかたどった円形宿舎で、全国の若者が集い、弥栄神社で天照大神が開拓団の精神的象徴であることを習った。加藤完治のもとで「満蒙青少年義勇軍」の若い団員は、1930年代後半以降の国家主義の強化に協力するようになった。

「傀儡」皇帝の国家神廟

「傀儡国家」満洲国の皇帝溥儀も満洲における神道の一面を示している。1940年に満洲国帝宮内で天照大神を奉斎する建国神廟が建設された。それは皇帝溥儀を直接に天照大神一すなわち大日本帝国の天皇の下に位置付けることを意味した。元々1932年には満洲国が儒教に基礎を置いて、「王道楽土」や「五族協和」等のスローガンを掲げ建国された。ただし、1930年代後半以降、総動員を求めている日本は、天照大神を中心とした統一を強力に推し進めるといった目標を立てた。その結果、満洲国および溥儀は実際には、形式上、手にしていた独立性すらも公的に失った。建国神廟が設立された当時、満洲国の建国で命を落とした人々の魂を奉斎する建国忠霊廟も建てられた。こうして満洲国は自らの伊勢神宮と靖国神社を持ち、完全に大日本帝国の一部となっていた。1930年後半から1940年代の時期において、ナショナリズムのシンボルとなった「海外神社」は、東亜民族文化協会の小笠原省三らが構想したアジアと日本の宗教の調和を一瞬にして崩壊させた。

いくつもある例のうちの五つに過ぎないが、これまで紹介した人物を考察しても、時代と場所によって影響を受けた近代日本の「神道」の、様々な側面を見ることができる。このことは、人はいかに歴史に動かされ、また歴史を動かせるかを示している。日本を投影するかのよう、植民地期の満洲においても、様々な「神道」が人々に示されていた。その人々の思想と立場を深く理解するために、満洲と宗教とが繋がっていた人々の人生について研究し、近代日本における神道を改めて考察し続けたいと考えている。

ⁱ 中島三千男 「旧満洲国における神社の設立について」、木場明志・程舒偉『日中両国の視点から語る 植民地期満洲の宗教』（柏書房、2007）。

ⁱⁱ 出口王仁三郎の「入蒙」については、出口王仁三郎『靈界物語 特別篇・入蒙記』（大本教典委員会、1924）。又は村上重良『評伝出口王仁三郎』（三省堂、1978）、Stalker, Nancy K. 『Prophet Motive : Deguchi Onisaburo, Oomoto, and the Rise of New Religions in Imperial Japan』（University of Hawai'i Press, 2007）等。

ⁱⁱⁱ 劉建輝 「『満洲』幻想の成立とその射程」、『アジア遊学』（44、2002）。

^{iv} 山根理一 『旧満洲天理村開拓民のあゆみ（前・後）』（山根理一、1995）。または藤井建志 「天理教の植民地期中国東北地域における布教活動とその二面性」、木場明志・程舒偉『日中両国の視点から語る 植民地期満洲の宗教』（柏書房、2007）。